

# RadioDays



## ラジオデイズ

声には、  
人の体温があり物語がある

月刊「ラジオデイズ」10月号（通巻第17号）  
2008年9月28日発行  
[発行人] 赤塚祐一郎  
[編集人] 大森美知子  
[発行所] 株式会社ラジオカフェ  
東京都新宿区新宿1-6-5 シガラキビル6F  
Email: info@radiodays.jp FAX: 03-5356-8281  
http://www.radiodays.jp

10

October Edition  
2008, vol.17  
Free of charge

この人の声が聴きたい◎10月

春風亭百栄さん（落語家）

## なかなか始まらない 物語のために

春風亭百栄師匠が、ロスアンゼルスのスシバーで、春風亭栄枝師匠に出会ったという逸話は有名だが、聞いてみると、入門には実はもう少し複雑な経緯があったようだ。

LAから帰国した青木規雄青年（百栄師匠の本名）は、まず立川流の門を叩いたが、折悪しく入門できない。「ちよつと一回りしてきなさい」と言われ、じゃあということでも栄枝師匠を訪ねるのだが、ここからがおかしい。栄枝師匠に紹介の労を取って貰って、古今亭円菊→三遊亭円弥→川柳川柳と次々に門を叩くが、いずれも間が悪く入門を許されない。どうしたものかと案じていると、栄枝師匠がこう言ってくれたという。

「色々不利なことがあるかもしれないけど、よかつたら俺の弟子になってみない？」  
これは、美談であろう。栄枝師匠のなんとも言えない腹の大きさが感じられる。と同時に、私はこの入門にまつわる「ちよつと一回り」に百栄師匠の存在論的習性のようなものを感じてしまう。

名作「怪談はなしベタ」は、修学旅行の夜の高校生たちの会話である。

イトウ君という怪談名人がたつぷり怖い話を披露した後、アオキ君がおずおずと（しかし自信たっぷりに）自分も「すつげえコワイ話」ができると言いだす。クラスメートは半信半疑だが、よーし、聞かせてもらおうじゃないのと彼を促す。



ところが、その怖い話はいっこうに始まらない。アオキ君は、まぜつかえしたり、横道に逸れたり、バカにする級友に怒ったりしながら、どんどん怖い話のスタート地点から後退していくのだ。

この掛け合いがものすごくおもしろい。「俺のおじさんから聞いたハナシ」がいつの間にか「タクシーの運転手から聞いたハナシ」にすり替わり、実はそのおじさんがタクシーの運転手と同一人物であると言って、級友を啞然とさせたりする。

怪談という物語を遅延させ、必死で逃亡しながら、百栄アオキ君は、始まらない怪談という落語の物語を成立させていくのだ。

これはジョークだが、もし栄枝師匠が「俺の弟子になってみない？」と切りださなければ、青木規雄青年は、次々に別の師匠を訪ね延々と入門願いの旅を続けていたのではないだろうか。

ネバーエンディングストーリーは、物語作家にとってひとつの理想的な作品の形態だが、その一方には、ネバースターティングストーリーという方法もある。

百栄師匠は、この作品を「文学である」と自認しているようだが、彼の芸はミヒヤエル・エンデより、フランツ・カフカに近い。確かに「城」の主人公、測量技師Kは、どこかはなしベタなアオキ君に似ている。

（ラジオデイズ・プロデューサー 菊地史彦）

ラジオデイズは、文芸・対話・話芸を三本の柱に、声のもつ魅力に特化した音声コンテンツを制作し、ダウンロード販売するWebサイトです。

飄逸で含蓄のある随筆、瑞々しい感性の横溢する詩歌や小説の朗読、個性的な対話者たちの真摯な言葉の応酬から生まれる知的交歓、粋と人情の落語や講談などなど、大人のお楽しみにたえる魅力的なコンテンツが満載です。

### ただいま入会随時受付中！

会員（会費無料）になられると、期間限定の無料コンテンツがお楽しみいただけます。サイトでは、声の魅力を凝縮したコンテンツのすべてが試聴できるほか、演者のプロフィールやコラムなど読み応えも十分です。どうぞお立ち寄りを！

<http://www.radiodays.jp>

### 〈対話〉

内田樹のダイアログ・シリーズをリリーク。小林秀雄賞を受賞された気鋭の思想家・内田樹氏と、悪ガキ時代からの盟友ラジオデイズのプロデューサー・平川克美とともに、錚々たるお客人をお招きして語り尽くします。ただいまは脳医学者の養老孟司さんとの対談「概念化する世界の読み方」の第一章、音楽家の大瀧詠一さんとの対談「大瀧詠一」の第一回が無料ダウンロード中。音の旅「小糸ん・遊雀の大井鐵道SL列車の旅」も登場です。

### 〈文芸〉

作家の関川夏央さん、小沢昭一さん、詩人の清水哲男さんなど多彩な解説者を迎えた「声のエッセイ」コレクションが評判。また、「声の詩集」シリーズからは、女優馬丸せつこさんの朗読、詩人の正津勉氏がナビゲートする「詩人の愛」I・IIをお届け中。女優有馬稲子さん朗読の「水仙」も登場。さらに本邦初となる落語家・入船亭扇辰師、柳家三三郎朗読による江戸弁で聞く落語調「ゴリ」「外套」「鼻」も発売。詩人の小池昌代さんのコラム「言問い小路」も好評連載中。

### 〈話芸〉

ラジオデイズ収録の新鮮なオリジナル音源百五十本余をお届け中。時代に磨かれた古典を自家薬籠中に現代に演じきる噺家たち。そして、時代の流れから湧き出た、かつて語られたことのない新作に鑄を削る噺家たち。ライブ音源だけに一期一会の噺に出会えます。不定期ですがラジオデイズイチオシの噺家さんの演目を無料ダウンロードにて提供していきますので、毎日覗きにきてみてください。まずは、試聴ボタンを。

# 明烏い話

連載第18回



本田久作

上方の噺家に「落語で大衆芸能やろか？」と真顔で聞かれたことがある。今の落語ブーム

が起る数年前のことで、落語はまだマイナーな演芸であり、そのため落語が好きな人はちよつとした通人を気取っていられた、そんな時期である。今から思い返すと、落語が大衆芸能か否かと問うには絶妙なタイミングでもあった。時流に流されやすい私は落語は大衆芸能だと断言できなかった。そして、そう言う代わりに「そもそも大衆芸能って何ですのん？」と逆に問い返した。彼の答は明快だった。「テレビに出てるもんが大衆芸能やがな」である。この噺家はかつてテレビで売れたことがあったため、こういう言葉が出て来たのだろうが、なるほどテレビに出る出ないというのも大衆芸能の一つの基準であらう。

私が落語を聞き出した頃から「落語はいづか能狂言になる」と言われていた。わざわざ説明するまでもなく、これは誉め言葉ではない。落語もこのままでは能や狂言のように大衆には理解出来ないものになり果ててしまうだろう、と警告しているのだ（能狂言のファンは否定するだろうが、そちらの方の議論はひとまず置く）。現在の落語ブームしか知らない人には嘘のように聞こえるだろうが、私は樂觀していい。落語がいつの日か大衆から遊離し、一般人がたやすく楽しめなくなる芸能になって

も不思議ではないと思っている。落語には純然としたルールがあるからだ。そしてルールが分からないと理解出来ない娯楽は娯楽ではない。話を東京の古典落語に限って言えば、落語のルールとは粋を理解するということだろう。そしてそのためには最低限度の教養が必要である。何が野暮で何が粋なのかを区別するのは教養なのだ。だから、落語の中で江戸っ子は当たり前のように粋不粋をわきまえぬ田舎者を馬鹿にする。今風に言えば差別だ。だが、これは仕方がないことなのである。落語はあくまでも都市の文化なのだ。昭和の初期から中期にかけて吉本興業は落語を見殺しにした。吉本は資本主義の優等生である。その伶俐すぎる算盤勘定が落語は「大衆」に向かないと判断したのであろう。そしてその判断はある意味正しい。極論すれば田舎者に理解出来る落語は落語ではないのだ。

先目円丈に会った時、古典落語について語っていると、円丈がぼそりと「だけど、今は下駄屋はないでしょ」と言った。下駄は粋を競う履き物である。俗に「足下を見る」と言うが、その時に見られても恥ずかしくないどころか、どうだ、とひそかに誇るのが下駄である。だが、その下駄を売る下駄屋は今はどうもない。靴屋では今でも下駄を売ってはいるが、下駄を普段の履き物にしている人は稀である。「大衆」が下駄よりも便利な靴の方を選んだからだ。

『子別れ』で熊さんが蒸し饅頭を見ながら涙を流していると、「あの人は清正公様の生まれ変わりじゃないか」と言われるくだりがある。非常に洒落たくすぐりだが、このギャグを聞いて即座に笑える人は今はほとんどいないだろう。私だってこのくだりで笑ったことはない。だが、洒落しているとは思って、こういうくすぐりはいつまでも残すべきだ、それでこそ古典落

語ではないか、と言いつつもしている。この態度が円丈の言う「下駄」である。こんな面倒臭いものをいつまでも大衆が喜んでいるはずがない。清正公が毒饅頭で暗殺されたことを知らないれば分からないくすぐりをいつまでも使っている落語はいつか滅びるだろう。

だがそれでも、円丈より年少の私はまだ下駄に愛着を持ち、こだわっている。円丈は私のような者を憐れみながら、新作という靴を今なお作り続けている。

●ほたて、きゅうざき

一九六〇年大阪府生、ライター。二〇〇二年の「仏の遊び」が国立演芸場日本舞集佳作受賞以来、落語、漫才など新作日本関係の賞を毎年総ナメの賞状注目の新進作家。主な受賞作「玉手箱」国立演芸場日本舞集優秀作、「儂の舞式」按察の夢「幽霊番長」（いずれも落語協会優秀賞）など。

## 私の讃大ばなし 拾七

三遊亭円丈

### 『しの字嫌い』

前座時代、師匠（六代目三遊亭円生）から習ったが、なんと四七ヶ所ものダメ出し。血の気の多い頃でもあり、師匠にたいしてキレたのが顔に出て、唇も真っ青に。それと察した師匠に「これ以上もういい」と結局は上げてもらったが、誰がやるもんか！と……二度とやっていない。

### 『わからない』

トラ箱の常連男が殺人容疑をかけられ、ついには死刑になるといふ、カフカバリーの不条理の世界を現出した幻の名作！自分自身もどうなっていくのか皆目わからない。遠い将来、かならずや演ってみたいと思っている。

### 『新・首提灯』

一年ほど前に独演会にかけてから、レベルアップしたくてときどき稽古している。登場する町人を二人にして、侍との三人構成に仕立てたのでキャラクター作りが難しく、いまだに演っていないのが気になっている。

# 行こみちが

女流二ツ目の修行日乗⑬



柳亭こみち

終電で大股を開いて寝た女性に声をかける女性を目にした。「大丈夫？ 財布落ちるわよ」。脚を閉じさせ靴を握らせている。女にたいし厳しくもいけば優しいのはいつも女だ。師匠に聞けない事を何でも教えてくれるおかみさんの言葉は、女性ならではの繊細さと思ひやりと明るさが溢れている。

前座時代、そのおかみさんの表情が曇っている日が続いた。「お前かみさん怒らせてるぞ」と師匠。え！私何したんだろう……。師匠のいない時間を狙っておかみさんの部屋をノックした。

師匠に小言を言われ続けている弟子を自分も叱ってはかわいそう、とおかみさんは決して小言を言わなかった。ただ黙って私をみつめていた。ところが語り始めたおかみさんの口からは、出るわ出るわ。私とんちんかん行動がわんさか。流しの磨き方、洗濯物の干し方量み方、トイレ掃除の盲点、口のきき方……。「女だからこそちゃんとできるようになさい。いい歳なんだから」。小言を我慢するほどおかみさんはストレスを溜めていた。だから笑顔が消えていたのだ。嬉しかった。初めての小言。おかみさんの懐に飛び込めた気がした。

翌日、プレゼントしたのにずっと着てくれなかったワンピースを着てくれた。「すぐキレイです！」。そう言っていると、またいつもの笑顔のおかみさんがいた。

●りょうていこみち

社会人生活を経て、平成15年柳亭無路に入門。18年11月二ツ目昇進。趣味はピアノ、ギター、ウクレレ演奏。特技は日本舞踊。妻流名取（音妻巻秀）。落語協会野球部・チームR所属。



## 柳家小ゑん

（おなまや・こえん）

柳家小さん門下。昭和六十年、真打昇進。独特の落語哲学を持ち、その存在は「新作落語」の分野において必要不可欠な存在。天文分野にも造詣が深く、「科学する落語家」の異名も。プラネタリウム落語会など落語の可能性を探る活動を積極的におこなっている。



## 瀧川鯉昇

（たきがわり・りしゅう）

柳家小三治門下、八代目春風亭小柳枝に入門。五二年より春風亭柳昇門。平成元年、真打昇進。一七年、亭号を「春風亭」から「瀧川」に改める。飄々としていながらも緻密な情景心理描写で、観客を江戸の異世界へ誘い込む。近年人気急上昇中の波に乗る嘶家の一人。



## 柳家喜多八

（おなまや・きはち）

柳家小三治門下、平成五年、真打昇進。「喜多八」と改名。「清く、気だるく、美しく」をモットーに印象的な立ち振る舞いで高座に現れる。滑稽話から大作まで自由自在に操り、「たけのこ」など演者の少ない珍しい斬もこなす、その芸域は広く深い。



## 三遊亭遊雀

（さんゆうてい・ゆうすけ）

平成三年、真打昇進。一八年、三遊亭小遊三門となり、独特の浮遊感と彫りの深い演じでとして活躍中。古典ネタを得意とする折り紙つきの実力派。一八年度、国立演芸場主催「花形演芸大賞」金賞を受賞。翌年大賞を受賞。自他ともに認める鉄道ファン。



## オリンパスシンクろる寄席

【日時】10月30日（金）午後6時45分開演（午後6時15分開場）【場所】お江戸日本橋亭

### 三遊亭歌之介

（さんゆうてい・かのすけ）

三代目三遊亭圓歌に入門。昭和五七年二ツ目、六二年、入門九年目にして一八人抜きの実打昇進。「歌之介」に改名。一度聴いたら忘れない、鹿児島生まれの独特の語り口と鋭い人間観察力を活かし、爆笑王の名をほしいままにする新作落語の旗手。



### 古今亭今輔

（ここんてい・いますけ）

古今亭寿輔門下。平成十年、二ツ目昇進。今年五月に真打昇進。古今亭今輔を襲名。過去にクイズ番組へ出演したほどの博覧強記な人物。その知識を活かし、ミステリーにも通ずる新作落語を次々と創作。新作落語の新たな担い手として注目されている。



### 柳亭こみち

（りゅうてい・こみち）

七代目柳亭燕路に入門。平成一八年十一月、二ツ目昇進。小柄ながら凛とした佇まいと、リズム感溢れる口跡は師匠譲り。小唄、都都逸などもこなし、聞き手をくぐいと惹きこむ。今後の活躍も楽しみな「いなせ」で骨太な芸で、本格派として注目されている。



### ●お聴き 松本優子

（まつもと・ゆうこ）

## ラジオデイズ二周年記念 オリンパスシンクろる 寄席プレミアム

【日時】10月21日（金）午後6時45分開演（午後6時15分開場）【場所】新宿・住友ホール

### 味な脇役・話芸のきまり文句

連載第17回

## 子供



松井高志

以前、「親心」というテーマできまり文句をご紹介したことがあったが、今回は、親の方はひとまずさておいて、子供についての言葉を拾い出してみる。まずだれでもすぐ思い当たるであろう、落語であれば「真田小僧」などでよく聞く諺が、

小児は白き糸の如し

だろう。「幼子は白き糸の如し」ともいう。白い糸はどのような色にも容易に染まる、同様に、幼児は大人の導きによって良くも悪くもなる、だからしつけは大事だ、ということ。「水は方円の器に随う」に似たニュアンスの譬えである。

しかしながら、実録小説「大岡政談」の中の二編「安間小金次」に、

教えぬこまはかえって覚えやすし

という「名句」もあって、親や教師がしつげよう、教導しようとする方へ、子供が行きたがろうとしない（大人から見ればろくでもない遊びばかり覚える）のも、最近に始まったわけではなく、昔からのことであつたように思われる。「瓜の蔓に茄子はならぬ」（血筋は争えない、の意）というポピュラーな諺がある。剣豪の子は剣豪になり、放蕩者の子はやはり放蕩者になる、というようなケースで講談に時々使われるのだが、これとほぼ同じ意味の諺に、

鳩の子は鴨にならぬ

というのがあらしい。これも実録小説「延命院實記」（講談「延命院」のネタ元。残念ながらまだ講談版を直に聞いたことはない）に、好色な男の倅はやはり好色、という意味で出てくる。やはり子供を思うように育てようというのは難しい。ほんの当座、手なずけようとしても失敗することが多いのだ。落語「蛸芝居」には、

太閤はんでも子供の守には往生した

とある。これが何らかの逸話によるのかは、残念だが筆者には分からない。ご存じの方があれば、ぜひご教授願いたい。

### ●まい・たかし

一九六〇年愛知県生。月刊誌編集者を経てフリーライター。著書に『人生に効く！ 話芸のきまり文句』（平凡社新書）『ナンドク』『難読漢字自習帳』（バジリコ）など。九月に新刊『江戸に学ぶビジネスの極意』ウェブサイトが発売された。『話芸。きまり文句』辞典』サイトは <http://vanguard.comology.rifty.com/>

## ラジオデイズ落語会

【会場】関交協ハーモニックホール（西新宿）

【入声銭】2500円

【時間】午後2時開演（午後1時30分開場）

●第14回 11月8日①

笑福亭福笑 林家しん平

※ご予約は、東京音協へお願いします。

http://www-only.jp 電話〇三三三〇一八二六

## オリンパスシンクくる寄席

【会場】関交協ハーモニックホール（西新宿）

【入声銭】2500円

【時間】午後6時45分開演（午後6時15分開場）

●第18回 11月13日①

立川談笑

春風亭百栄（栄助改め）

※ご予約は、東京音協へお願いします。

http://www-only.jp 電話〇三三三〇一八二六

## ラジオの街で逢いましょう

ラジオデイズでは、声と語りの魅力を求めて、深夜のラジオ番組も制作・放送しています。

お相手は、ラジオデイズプロデューサーの平川克美、菊地史彦、大森美知子、そして大阪は140Bの辣腕エディター江弘毅が務めます。これまでの放送は、ラジオデイズサイトにてストリーミング放送中。さらに、ポッドキャストでも配信中です。どうぞ真夜中の語らいに耳を傾けてみてください。

http://www.radiodays.jp

ラジオ関西毎週火曜日の深夜24時半から午前1時まで。

今後の放送予定（深夜のお客様）

9月30日 森永一衣（オペラ歌手）

10月7日 山本浩二（画家）

14日 北中正和（音楽評論家）

21日 森岡正博（哲学者・大阪府立大学教授）

## 長月の落語会ふたつ

ラジオデイズ一周年記念イベントとなるき

わめつけ落語会（9月2日）。演芸研究家の大友浩さんが「寄席で鍛えに鍛えた極めつけの一品が並んでいます」と。期待が膨らみます。開口一番はちっちゃくて可愛らしい春風亭ぼっぼさんの「金明竹」。さて、先鋒は古今亭志ん橋師匠。ネタは「藪入り」。奉公に出した幼い息子が三年目に初めて帰ってくる。親子の情の通い合いを師匠は実に清々しく演じてくれました。思わず涙腺が緩みます。大友さんとのトークは師匠の師である志ん朝師匠との思い出話に花が咲きました。続くは桂文生師匠の「馬の田楽」。師匠の美声の馬子唄は、寄席を一瞬でどかどか広大な田園風景へと誘います。トークは抱腹絶倒一九分け売げ斬など止まる所を知らず。コンテツ発売をお楽しみに。ト리는柳家小里ん師匠で「五人廻し」。女郎屋に上がったはいが、待てど暮らせど花魁は来ない。待ちくたびれた五人各様のキャラクターで笑わせます。トークではその昔若かりし時代の師匠の武勇伝に。客席は男子の羨まし顔で埋まりました。落語の聴き方には色々ありますが、さわめつけのこの人この斬を肴に酒を飲むのもまた格別でござんすねえ。

第16回オリンパスシンクくる寄席（9月17日）は、三遊亭白鳥師匠と林家きく麿さんの出演。開口一番は柳亭市朗さん「悟気の独楽」でご機嫌伺い。続いて林家きく麿さんが登場です。失踪した男の部屋で書棚裏の秘密の書棚が発見される。出て来たのは……。ネタはうれし恥ずかし「パンチラ倶楽部」。

上手いのかへたなのか分からないフラの利いたきく麿さんのしゃべりは癒し系。テーマ設定に引き気味だった客もほどなく引き込まれ爆笑の渦に！ さて、お待ちかね白鳥師匠。古典をやると言ってはじめた斬は「初天神」ですが、図抜けた金坊で「ハイパー初天神」に。古典落語の定番も師匠にかかると抱腹絶倒の爆笑斬に大変身。仲入り後はきく麿さん、座ただけで笑いが起こる。舞台は自転車置き場、不法駐輪で撤去された自転車返してもらいに男が訪れる「撤去します」。師匠を超えている？ こんな面白い落語家がまだ若手にいたのだと不勉強を実感。ト리는もちろん、絶対調の白鳥師匠。ネタは「子羊物語」。子羊と少年の友情が清々しい師匠お得意のメルヘン斬。歌舞伎の「勧〇帳」をベースに心あたたまる人情斬に仕上がっています。白鳥ワールドに暫し浸る。人気実力兼ね備えてきた白鳥師匠恐るべし！ 落語ってほんと面白いですねえ。（ラジオデイズ寺和尚）

上手いのかへたなのか分からないフラの利いたきく麿さんのしゃべりは癒し系。テーマ設定に引き気味だった客もほどなく引き込まれ爆笑の渦に！ さて、お待ちかね白鳥師匠。古典をやると言ってはじめた斬は「初天神」ですが、図抜けた金坊で「ハイパー初天神」に。古典落語の定番も師匠にかかると抱腹絶倒の爆笑斬に大変身。仲入り後はきく麿さん、座ただけで笑いが起こる。舞台は自転車置き場、不法駐輪で撤去された自転車返してもらいに男が訪れる「撤去します」。師匠を超えている？ こんな面白い落語家がまだ若手にいたのだと不勉強を実感。ト리는もちろん、絶対調の白鳥師匠。ネタは「子羊物語」。子羊と少年の友情が清々しい師匠お得意のメルヘン斬。歌舞伎の「勧〇帳」をベースに心あたたまる人情斬に仕上がっています。白鳥ワールドに暫し浸る。人気実力兼ね備えてきた白鳥師匠恐るべし！ 落語ってほんと面白いですねえ。（ラジオデイズ寺和尚）

## オリンパスシンクくる寄席の「楽屋口（^o^）」

シンクくる寄席オリジナルコンテンツ「楽屋口（^o^）」が携帯電話からお楽しみいただけます。



まずは、左の2次元バーコードを携帯のカメラで写してあらかじめ無料画像認識アプリ Sync ★R（シンクくる）をダウンロードしてください。

QRコードを撮影、または a@gwmj.jp（オリンパスのシンク★Rの公式サイト）に空メールを送信すると、ダウンロード先 URL が記載されたメールが返信されてきます。つぎに、Sync ★R（シンクくる）アプリを起動して、各ページにあるマークを携帯のカメラで撮影して保存・送信すれば OK。オリンパスシンクくる寄席のチラシのマークでもラジオデイズのお楽しみコンテンツをお楽しみいただけます。※このとき、それぞれのマークの全体が入るように、ピントが合うところまで離して撮るようになりますのがスムーズにダウンロードするコツです。どうぞ、お試しあれ！

### シンクくる（Sync ★R）とは？

オリンパス株式会社の開発による、先進の画像認識技術を活用したカメラ付き携帯電話用アプリのこと。新聞・雑誌などの紙面やテレビ画面上の画像を撮影するだけで、モバイルサイトへのアクセスを可能にします。

## ラジオデイズの窓から

夕方仕事を終え会社を出ると、心地よい風とともに、虫の音の大合唱が。もうすっかり秋です。昨年の今頃を思い出してみると季節を感じる余裕もなかったように思います。

ラジオデイズの「声」を皆様にお届けはじめてから早一年。一周年を機に、サイトも大幅にリニューアルいたしました。これからは皆様喜んでいただけるよう魅力ある音声コンテンツづくりに務めてまいります。

